〔論文〕

教職履修学生の資質能力向上に対する エクストラ・カリキュラムの効果*

作 田 良 三**

── 目 次 ──

1．はじめに
2．調査の概要と結果
3．おわりに

キーワード：エクストラ・カリキュラム、資質能力、大学生活

1．はじめに

本稿は、私立大学の教職履修学生の在学中における資質能力の向上に、サークル活動やアルバイトがどのような影響を及ぼしているのか、アンケート調査によって明らかにすることを目的とする。

教職履修学生を対象とした調査研究は数多い。しかし、その多くは国立大学教育学部における調査であり、私立大学における調査の蓄積は比較的少ない。また、資質能力を扱っている過去の調査研究は、調査項目が授業技術や生徒指導・学級経営等の教師特有のスキルに集中している。それらの事柄はもちろん重要である

＊謝辞：本稿は、2004－2005年度に、中国四国地区私立大学教職課程研究連絡協議会より研究助成をいただいて実施した調査研究結果の一部であり、この場を借りて深謝申し上げます。

＊＊ Ryozo SAKUDA　本学助教授、総合教育研究センター所属

が、本発表では、「社会人としての資質能力」に注目する。1997年教養審第一次答申に示されるように、「教員にはすぐれた資質能力を備えた社会人であることが当然求められ」ているのであるが、社会人としての資質能力に着目した調査研究はほとんど皆無である。教師特有のスキルというのも、教師という職業で必要とされる、社会人としての資質能力の複合体というとらえ方もできるのではないだろうか。この視点から教職履修学生の資質能力にアプローチすることは、教師教育のみならず、高等教育機関としての使命にも関連するものだと考える。

学生の資質能力に対する高等教育の効果を論じる際、そのカリキュラムや授業のあり方が論点として挙がってくることは至極当然のことである。近年におけるカリキュラム改革や授業評価等も、その観点が核にある。ただ本稿では、授業ではなく、サークル活動やアルバイトといったエクストラ・カリキュラムの効果に着目する。溝上（2001）は、大学生固有の世界を作り上げる大学生固有の事情として、学業、クラブ･サークル活動、アルバイト、就職、およびボランティア活動などのキャンパス外活動を挙げているが、改めて言うまでもなく、学生にとって大学生活は様々な活動・経験の機会にあふれている。「高等教育の効果」を考える際には、授業（education：アカデミックな側面）にのみ焦点を当てるのではなく、その他の活動（ソーシャルな側面）を加味する必要があろう。言うならば、「大学生活を送ることの効果」として、総体的に「高等教育の効果」を捉える必要性を感じる。

このようなサークル活動やアルバイトについては、従来の学生研究において、学生文化の実態や、学生の社会化への影響という観点からさまざまな調査研究が行われてきた（たとえば、丸山（1983）や柴野（1991）など）。近年においては、ボランティア活動を行う学生の増加も指摘され、そこに見られる学生の意識や行動等を研究するものも少なくない。また、概して、学生はそうしたエクストラ・カリキュラムを貴重な高等教育経験として積極的に評価する傾向にある。だが、これらのエクストラ・カリキュラムのうち、実際にどのような活動がどのような資質能力の形成に寄与しているのだろうか。

本稿では、そのような問題関心に立ち、教職履修学生の資質能力に対するエクストラ・カリキュラムの影響に焦点を当て、分析・考察したいと考える。

2．調査の概要と結果

アンケート調査は、中国四国地区の私立大学25校の協力を得て2005年夏に実施している。調査対象は、2005年７月の時点で、教育実習を終了した４年生である。サンプル数は1532部であり、男子455名（29.7％）、女子1077名（70.3％）である。

以下の分析では、まずエクストラ・カリキュラム（クラブ・サークル活動、アルバイト、ボランティア活動）の活動状況について確認しておきたい。その後、それらの活動と高校時の活動との関連性や、学生の抱く効用感等を探ることとする。つづいて、学生の「社会人としての資質能力」に関する分析結果を示し、その能力形成に対するエクストラ・カリキュラムの効果について考えたい。

(1) エクストラ・カリキュラム

(a) クラブ・サークル活動

サークル活動については、継続的に活動した学生は全体の56.5％であり、その約３分の２の学生が、とても熱心に取り組んでいると回答している。その種類としては、体育会系所属の学生は23.4％、体育会系サークル（同好会）が11.8％、文化系が20.1％、音楽系が7.1％と、体育会系の学生が多くみられた[(1)]。参加の有無について男女間の差はないが、種類別では体育会系で男子、文化系・音楽系で女子の占める割合が高くなっている。

活動時間は、週平均で４時間未満という学生が45.5％と最も多く、４～12時間が35.8％と続いている。ただし、この活動時間はサークルの種別によって大きく異なっており、たとえば、体育会系では12時間以上活動する学生が34.9％と多く、文化系では４時間未満が64.5％を占めている。

サークル活動は本来学生が自主的に参加する活動であるため、活動内容が楽しいという学生は90％超（「とてもあてはまる」58.6％、「少しあてはまる」34.2％）、人との交流が楽しいという学生は「とてもあてはまる」という学生で３分の２を占めている。なお、文化系サークルに所属する学生は、他のサークル参加者と比べると、比較的その活動内容を楽しいと感じていない傾向にある（５％水準で有意）。

次に、サークルと学業の関係に関してみてみると、授業よりも優先していると

いう学生は10人に１人（「少しあてはまる」という学生を合わせると約３割）いる計算になる。また、多くの学生がサークル活動と勉強が「両立している」と考えており、この「両立」に関しては、サークル種別との関連はみられない。ただ、この「両立」には注意が必要である。大学の成績に関する自己評価とこの項目の関係を調べたところ、「両立している」という学生であっても、成績が良好でないと考える学生が約３分の１いるのである。自己評価であるため、自分の成績を過小評価している学生も何名かいるのかもしれない。しかし、学生にとっての「両立」とは、必ずしも成績が上位でなくてもよいのだと考えられる。

(b) アルバイト

アルバイトについては、表１に示すように、接客・サービスのアルバイトを定期的にしていた学生が最も多く、62.5％である。[(2)] これらの項目すべてに「経験なし」と回答した学生は6.2％であるため、長期・短期を含めて何らかのアルバイト経験がある学生は、93.8％に及ぶ。また、全体の約４分の３（73.3％）の学生が、何らかのアルバイトを「定期的にしていた」と回答している。なお、女子学生の方がアルバイトをしていた者の割合が高く、塾講師や家庭教師といったアルバイトも女子の方がする傾向にあった。一方、男子は、接客・サービスに関わるアルバイトをする傾向にあった。

表１　アルバイトの活動状況

	定期的に	短期で	長期休暇中のみ	経験なし
塾講師	5.7	2.3	1.3	90.7
家庭教師	14.0	6.0	1.3	78.7
接客・サービス	62.5	12.8	5.9	18.9
その他	6.0	6.8	4.6	82.6

では、どれくらいの頻度でアルバイトを行っているのだろうか。定期的にしていたという学生のうち、週当たりでは、２～３日が50.1％、４～５日が42.0％であり、週当たりの平均労働時間は５～10時間が28.0％、10～20時間が33.2％、20～30時間が18.4％であった。組み合わせとしては、週２～３日に10～20時間アルバイトしている学生というのが最も多く、20.0％であった。次いで、２～３日の５～10時間が17.9％、４～５日の20～30時間が14.5％であり、これら３つの組み合わせで約半数を占めている。

アルバイトと学業の関係に関しては、授業よりもアルバイトを優先していると

いう学生が20人に１人いる計算になるが、51.0％の学生は「まったくあてはまらない」と回答している。これは、授業を優先する学生が多いという点では似ているが、サークル活動の場合とは若干分布が異なっている。というのは、サークル活動では、この問いに対して「全くあてはまらない」と言い切る学生が34.0％であり、サークル活動の優先順位が上の学生も３割ほどいるのに対し、アルバイトでは、２人に１人が授業優先と断言しているのである。大学での勉学に支障のない範囲でアルバイトをしようとする学生の姿が看取できよう。

また、サークル活動の場合と同じように、アルバイトと学業が「両立している」と考える学生は多いのだが、成績との関係を調べると、やはり「両立している」という学生でも成績が必ずしも良好なわけではなかった。

(c) ボランティア活動

大学入学以降の活動として「ボランティア活動をする」という項目に「とても当てはまる」と回答した学生は12.5％,「少し当てはまる」という回答は25.9％であった。つまり、大学在学中にボランティア活動を経験した学生は４割近くいることになる。[(3)] 性別にみると、ボランティア経験のある学生は女子に多く見られる(男子：25.9％、女子：43.7％)。

ボランティア活動と必ずしも一致するものではないが、大学入学後に児童生徒と交流する機会があるかどうかを尋ねると、44.2％の学生が交流機会を持っていた。また、地域社会との親密さを測る尺度として「地域の行事への参加度」を尋ねたところ、これについては若干数値が下がり、18.3％程度であった。

(d) エクストラ･カリキュラム活動の類型

(a) ～ (c) では別個に活動状況を概観したが、ここで、これら三種の活動の有無によって、学生を８つのタイプに類型しておこう。すると、表２に示すように、「サークル活動とアルバイト」、「アルバイトのみ」、「サークル活動とアルバイトとボランティア活動」という３タイプがそれぞれ約20％を占めていた。すなわち、「アルバイト＋α」という活動スタイルの学生で７割強を占めているのである。

表２　エクストラ・カリキュラム活動の類型

サークル活動のみ	アルバイトのみ	ボランティア活動のみ	サークル活動＆アルバイト	サークル活動＆ボランティア活動	アルバイト＆ボランティア活動	サークル活動＆アルバイト＆ボランティア活動	いずれもせず	合計
8.5	20.6	3.6	22.6	4.6	9.7	20.6	9.8	100.0

(e) 高校時の活動との関連

では、大学生活と高校生活とのあいだに関連性はあるのだろうか。まず、サークル活動と高校時の部活動参加との関連を見ておきたい。高校時に部活動に熱心に取り組んだかどうかを尋ねたところ、「とてもあてはまる」学生は48.6％、「少しあてはまる」という学生は18.0％であり、合わせると約３分の２の学生が部活動に熱心に取り組んでいたといえる。[(4)] そして、大学でサークル活動をしている学生の55.9％は、この高校時の部活動に関する設問で「とても当てはまる」と回答している（サークル活動をしていない学生では38.5％）。つまり、高校時の部活動と大学でのクラブ・サークル活動との関連性は高いといえる。なお、性別に関して言えば、高校時の部活動参加率は男子の方が高い。

アルバイトに関しても、高校時にアルバイトをしていたという学生は、大学でもアルバイトをする傾向にある。高校時のアルバイト経験者は全体の11.1％だが、その9割は大学でも定期的にアルバイトをしている。それに対して、高校時に経験していない学生のうち、大学入学後定期的にアルバイトをしているという学生は71.3％である。

ボランティア活動については、高校時にボランティア経験があるという学生は21.0％であり、このうち60.4％の学生は大学でもボランティア活動を行なっている。高校時にボランティア活動を「あまり」あるいは「まったく」しなかったという学生のうち、大学入学後に経験したという学生は32.5％である。このように、大学でのボランティア活動も、入学前のボランティア経験（あるいはボランティア意識）と関連がみられる。

さて、高校時の活動についても、大学生活と同様に、活動の有無によって学生を類型化することとしたい（表３）。すると、部活動のみという学生が48.0％と最も多く、次いで、いずれの活動もしなかったという学生が23.2％であった。高

校時と大学での活動の関連性はたしかに高いが、大学生活（表２）と比較すると、大学入学後に活動範囲が学校（キャンパス）外へと広がると同時に多岐にわたっている様子が明白である。

表３　高校時のエクストラ・カリキュラム活動の類型

部活動のみ	アルバイトのみ	ボランティア活動のみ	部活動＆アルバイト	部活動＆ボランティア活動	アルバイト＆ボランティア活動	部活動＆アルバイト＆ボランティア活動	いずれもせず	合計
48.0	4.1	4.7	3.6	12.9	1.3	2.2	23.2	100.0

（f）効用感

では、サークル活動やアルバイトをしている学生は、それらの活動に関してどのような効用感を見出しているのだろうか。その集計結果が表４である。まずサークル活動の効用に関しては、「人間的に成長したと思う」学生は61.1％、「教職に就いた時に役立つ」と考える学生も55.9％いるのである。特に、いずれの問いに関しても、体育会系所属の学生がそう思う傾向がつよい。

また、アルバイトの効用に関しては、「人間的に成長したと思う」学生が59.9％、「教職に就いた時に役立つ」と考える学生が48.7％おり、サークル活動と同じように、多くの学生が効用感を抱く傾向にある。特に、塾講師や家庭教師のアルバイトをしていた学生は、「教職に就いた時に役立つ」と考える傾向にある。

表４　エクストラ・カリキュラムに関して学生が抱く効用感

	とてもあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
サークル活動で人間的に成長したと思う	61.1	27.0	8.9	3.0
サークル活動での経験は教職に就いた時に役立つ	55.9	27.1	11.7	5.3
アルバイトによって人間的に成長したと思う	59.9	33.9	5.1	1.1
アルバイトの経験は教職に就いた時に役立つ	48.7	33.7	13.1	4.5

（2）社会人としての資質能力

社会人としての資質能力としては、協調性や責任感、リーダーシップ能力など

の18項目を取り上げる。これらの質問項目は、コンピテンシーに着目しつつ、小方（2003）らによる学生調査や原田・作田（2000）らの社会人調査等の項目を参照しながら、広範にわたるよう配慮して設定を試みたものである。

表５　「社会人としての資質能力」に関する素集計

	とても伸びた	やや伸びた	あまり伸びなかった	まったく伸びなかった
自分からすすんで学習する	21.5	45.8	28.2	4.5
資料や情報に基づいて、自分の意見を表現する	21.7	52.3	13.1	3.0
人と互いに協力し合って、物事をなしとげる	40.1	46.7	11.8	1.4
人の意見を的確に理解する	22.8	63.8	12.5	0.9
長い文章の内容を正確に読み取る	8.0	46.0	41.5	4.5
今までの考え方にとらわれず、新しいものを創り出す	21.3	46.3	28.9	3.6
問題点を見つけ出し、その改善・解決方法を考える	20.6	54.6	23.2	1.6
物事を筋道立てて分析する	19.2	53.1	25.2	2.5
自分の意見を、まとまった文章で的確に表現する	14.4	47.7	32.9	5.1
相手（人）の立場に立って考える	45.3	45.8	8.1	0.8
与えられた役割や分担でなくても、すすんで取り組む	22.0	48.1	26.2	3.7
人の長所を見ぬき、適切な役割・分担を任せる	21.8	44.4	29.7	4.1
知らないことやわからないことを、積極的に調べる	26.4	48.8	22.6	2.2
人といっしょに作業するとき、率先して取り組む	24.1	47.0	26.1	2.8
決められた役割や分担を、責任もって最後までやりとげる	46.5	45.2	7.3	1.1
情報や意見の要点を的確に把握する	14.2	58.3	25.7	1.7
人と一緒に作業するとき、声をかけ、みんなのやる気をもり立てる	27.7	42.5	25.6	4.2
社会での出来・時事問題に関心を持ち、情報を得る	22.3	44.3	28.8	4.5

各項目について、大学在学中にどの程度伸びたと考えるのか尋ねた結果が表５である。全体的に「やや伸びた」という回答が多く、いずれも50％前後の数値が並んでおり、「とても伸びた」という回答と合わせると、多くの学生が能力の向上感を実感しているといえる。比較的「伸びなかった」という回答が多い項目としては、「長い文章の内容を正確に読み取る」や「自分の意見を、まとまった文章で的確に表現する」といった、文章読解・表現能力にかかわるものが挙げられる。

これらの項目について主成分分析（バリマックス回転）をおこなうと、表６に示すように３つの成分が抽出された。成分１は、分析力や問題発見・解決能力、文章読解能力や理解能力などから構成されており、「内容把握能力」と命名する。

同様に、成分２はリーダーシップ能力や責任感等で構成され「対人関係能力」と、成分３は自発的な学習や情報収集・発信能力に関する項目から構成されており「知的行動力」とそれぞれ命名することとする。

表６　資質能力に関する主成分分析

	成分１	成分２	成分３
物事を筋道立てて分析する	0.707	0.166	0.133
問題点を見つけ出し、その改善・解決方法を考える	0.662	0.317	0.128
自分の意見を、まとまった文章で的確に表現する	0.624	0.078	0.314
人の意見を的確に理解する	0.621	0.376	-0.001
情報や意見の要点を的確に把握する	0.612	0.213	0.299
長い文章の内容を正確に読み取る	0.609	0.037	0.326
今までの考え方にとらわれず、新しいものを創り出す	0.572	0.249	0.146
人と一緒に作業するとき、声をかけ、みんなのやる気をもり立てる	0.160	0.690	0.213
人といっしょに作業するとき、率先して取り組む	0.103	0.678	0.304
人と互いに協力し合って、物事をなしとげる	0.190	0.674	-0.007
決められた役割や分担を、責任もって最後までやりとげる	0.158	0.654	0.144
与えられた役割や分担でなくても、すすんで取り組む	0.105	0.616	0.319
相手（人）の立場に立って考える	0.326	0.542	-0.026
人の長所を見ぬき、適切な役割・分担を任せる	0.295	0.514	0.190
自分からすすんで学習する	0.178	0.199	0.710
知らないことやわからないことを、積極的に調べる	0.144	0.229	0.701
社会での出来事・時事問題に関心を持ち、情報を得る	0.211	0.069	0.597
資料や情報に基づいて、自分の意見を表現する	0.406	0.225	0.532
負荷量平方和	3.348	3.286	2.281
寄与率（%）	18.6	18.3	12.7
累積寄与率（%）	18.6	36.9	49.5

(3) 社会人としての資質能力に対するエクストラ・カリキュラムの効果

先の主成分分析で抽出された３成分の成分得点が、エクストラ・カリキュラムの活動状況によってどのように異なるのかを探るべく、平均値の差の検定を行なった。まず、サークル活動に関しては表７のような結果が得られた。

この表より、サークル活動を行なっている学生は、そのサークルの種別を関係なく、「対人関係能力」を向上させていることが読み取れる。ちなみに、活動時間による違いを調べてみると、週当たりの活動時間が４時間未満の学生よりも、４

時間以上活動している学生の方が高い数値を示していた（５％水準で有意）。活動時間は体育会系の学生が長い傾向にあるが、サークル種別が関係していないこともあり、いずれのサークルであれ、活動時間が長い（部員等との交流時間が長い）と「対人関係能力」が向上するということが確認された。このことは、クラブ・サークル活動が学生の社会化の場としてその機能を果たしていることを示しており、学生自身、その実感（効用感）を抱いているのである。

表７　サークル活動と資質能力の関係

	内容把握能力		対人関係能力		知的活動力	
所属	0.030		0.197	***	-0.016	
所属せず	-0.037		-0.245		0.029	
体育会系	0.005		0.237		-0.054	
体育同好会系	-0.083		0.284		-0.006	
文化系	0.083		0.154		0.060	
音楽系	-0.011		-0.028		-0.095	

注）*<.05, **<.01, ***<.001（以下同様）

次にアルバイトについてであるが（表８）、定期的にアルバイトをしていたかどうかでは、「対人関係能力」において0.1％水準での有意差が確認された。ただ、アルバイトの種別との関係を調べると、「対人関係能力」に関しては有意差がみられなかった。すなわち、どのようなアルバイトであれ、定期的に行なうことによって「対人関係能力」が向上すると読み取れる。

一方、「内容把握能力」と「知的活動力」に関しては、アルバイト経験の有無では統計的有意差が見られなかったが、アルバイト種別によって明確な違いが見られた。すなわち、塾講師や家庭教師を定期的にアルバイトした学生は、それらの能力を向上させているのである。

表８　アルバイトと資質能力の関係

	内容把握能力		対人関係能力		知的活動力	
定期的にしていた	0.025		0.057	***	-0.027	
定期的にしていない	-0.071		-0.161		0.070	
塾講師・家庭教師	0.225	**	0.150		0.316	***
接客・サービス（+その他）	-0.038		0.036		-0.089	
塾・家庭教師+接客他	0.180		0.106		0.100	
その他	0.075		0.003		-0.186	

表９　ボランティア活動と資質能力の関係

	内容把握能力		対人関係能力		知的活動力	
ボランティア経験あり	0.005		0.261	***	0.140	***
ボランティア経験なし	-0.035		-0.165		-0.090	

ボランティアに関しては、経験の有無による差異を調べたが、経験のある学生

は「対人関係能力」および「知的活動力」を向上させていることが見て取れた（表９）。

では最後に、エクストラ･カリキュラム活動の８類型を用いて分析した結果を示しておこう。それが表10である。この表を見てもらうと、サークル活動やアルバイトが「対人関係能力」を向上させるといっても、それのみの活動では向上に至っていない様子が見受けられる。ただ、ボランティア活動は、それのみの学生が「対人関係能力」で負の値を示しているとはいえ、全体的にはボランティアを含む活動をしている学生が、全体的に能力を向上させる傾向にあると推察される。

表10　資質能力とエクストラ・カリキュラム活動類型の関係

	内容把握能力		対人関係能力		知的活動力	
サークル活動のみ	-0.096	*	-0.036	***	-0.087	***
アルバイトのみ	-0.020		-0.321		-0.029	
ボランティア活動のみ	0.281		-0.168		0.206	
サークル活動＆アルバイト	0.074		0.105		-0.185	
サークル活動＆ボランティア活動	0.012		0.399		0.332	
アルバイト＆ボランティア活動	-0.006		0.161		0.076	
サークル活動＆アルバイト＆ボランティア活動	0.042		0.346		0.111	
いずれもせず	-0.241		-0.523		0.041	

３．おわりに

本稿では、教職履修学生の資質能力向上に対するエクストラ・カリキュラムの効果に迫った。その結果、資質能力の形成に対して影響力をもつ要因としては、ボランティア活動が第一に挙げられる。ボランティアの活動内容やそれに対する学生の意識等については、今回の調査票で詳細に尋ねていないためこれ以上の分析は難しいが、大学生のボランティア活動は今後検討を要する研究課題だといえよう。そのほか、塾講師や家庭教師といったアルバイトの経験が、「内容把握能力」や「知的活動力」を向上させていることも明らかとなった。

なお、多くの活動を行なっている学生の方が、アンケートにおいて「対人関係能力」が向上したと回答（自己評価）していることは、至極当然の結果ともいえる。活発に活動すれば、その分多くの人と接して協同する機会が多くなるわけで

あり、そのなかで他者への思いやりやリーダーシップ能力を高めることは十分に想定できる結果である。だが、ここで介護等体験に関する分析結果も提示しておきたい。介護等体験とは、1998年度以降の入学生で小・中学校の教員免許状を取得する学生に義務づけられた体験であり、その期間は７日間（以上）とされている。これはまさに、教員養成上「意図的に」設定された体験機会なのである。しかし、この介護等経験の有無による違いを調べたところ、「対人関係能力」との関連は見出されず、「内容把握能力」で５％水準の有意差が見られただけであった。いくら対人機会を有するからといっても、このような短期間の体験では、大学在学中の経験をトータルにとらえた場合、「対人関係能力」への影響力は相対的に低いといわざるを得ないのである。そういった意味では、自らが意欲的に取り組み継続させている日常のエクストラ・カリキュラム活動は、正規のカリキュラムでは培えない能力形成の場であるということを再認識したい。

次に、サークル活動やアルバイトについては、たとえば山崎（2002）では、若い世代の現職教員に、正課活動よりもサークル活動といった課外活動の効果を挙げる者が多いことが指摘されている。また、やや古いデータではあるが、概ね、大学卒業生は高等教育経験を振り返ったときに、正課活動よりもアルバイトやサークル活動といったエクストラ・カリキュラムの効果を表明する傾向にあるという（山崎 1989）。実際、本分析結果においても、サークル活動やアルバイトで「人間的に成長できた」という問いに「とてもそう思う」と回答した学生は約６割、「教職に就いた時に役立つ」という問いに「とてもそう思う」という学生は５割前後いたのである（「ややそう思う」学生を合わせると、どちらも８割を超える）。おそらくボランティア活動に関しても同様な傾向があるものと推察される。このように、エクストラ・カリキュラムに対する学生の効用感は概ね高いのである。

最後に、その点については異議を唱えておきたい。本稿ではエクストラ・カリキュラム内の効果（の差異）に関して言及してきたが、それは正課活動との相対的な効果を意味してはいない。つまり、種々の活動が「対人関係能力」を向上させ、ボランティア活動や塾講師や家庭教師といったアルバイトの経験が、「内容把握能力」や「知的活動力」を向上させるといっても、その影響力が正課活動よりも大きいのかどうかについては触れていないのである。この点に関する詳細は別稿に譲ることとしたいが[(5)]、ここでは大学授業の影響力との比較をしておきたい。

表11は、各成分の成分得点をそれぞれ従属変数とし、サークル活動・アルバイト（塾講師・家庭教師）・ボランティア活動のそれぞれのダミー変数、および「授業への関わり度」に関する合成変数[(6)]の成分得点を説明変数として重回帰分析を行なった結果である。この表から分かるように、いずれの能力に対しても「授業への関わり度」がプラスの影響を及ぼしており、その影響力も比較的大きいのである。肝心なことは、このような授業の効果（学生を授業に積極的にコミットさせることの効果）を念頭に置きつつ、学生が抱く効用感に惑わされずに、エクストラ・カリキュラムの効果を過大評価・過小評価することなく捉えることであろう。そうすることで、大学在学中の高等教育経験と学生の能力形成の関係見取り図を描き出すことができ、キャンパス・ライフのデザイン化へとつながるであろう。

表11　資質能力形成に関する重回帰分析

	内容把握能力		対人関係能力		知的活動力	
	β		β		β	
サークル活動	0.023		0.191	***	-0.052	*
アルバイト（塾講師・家庭教師）	0.073	**	0.011		0.048	
ボランティア活動	-0.022		0.133		0.021	
授業への関わり度	0.212	***	0.197	***	0.388	***
adj. R^2	0.050	***	0.115	***	0.158	***

注

(1) サークル種別については、所属していたものすべてに〇をつける形式（複数回答可）の質問である。そのため、複数のサークルに所属している学生については、次のように分類し、以下の分析に用いている。すなわち、「体育会系＋その他のサークル」という組み合わせの学生は「体育会系」に、「体育会系サークル（同好会）＋文化系or音楽系」の場合は「体育会系サークル（同好会）」に、「文化系＋音楽系」の場合は「文化系」にそれぞれ分類している。

(2) アルバイトに関する設問は、表１のように、「塾講師」、「家庭教師」、「接客・サービス」、「その他」の4項目について、「定期的にしていた」「定期的ではないが短期でしていた」「夏休みなど長期休暇中だけすることがあった」「大学入学後したことがない」という選択肢をそれぞれ設けている。以後の分析では、「定期的にしていた」学生を「アルバイト経験者」と位置

づけており、不定期にアルバイトをしていた学生は便宜上「未経験者」としてカテゴライズしている。

(3) この「とても当てはまる」と「少し当てはまる」に回答した学生（38.4％）を、ボランティア活動経験者として、以後の分析に用いている。

(4) 「部活動に熱心に取り組んだ」という設問に対して、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の４段階で尋ねている。部活動に所属していなかった学生は「まったくあてはまらない」と回答するか、あるいは無記入だと考えられる。ちなみに「まったくあてはまらない」という学生は19.9％、無記入は10名である。

(5) 全国私立大学教職課程研究連絡協議会編『教師教育研究』第20号（2007年５月刊行予定）に所収予定の拙著「学生の意欲・能力の向上に資する高等教育経験―中国四国地区加盟大学での学生アンケート結果より―」を参照のこと。

(6) 「授業への関わり度」とは、「学科や専門の授業に熱心に取り組む」「授業の内容について、教員に質問をする（授業全般）」「授業の内容について、教員に質問をする（教職科目）」「授業中、ディスカッションをする（授業全般）」「授業中、ディスカッションをする（教職科目）」という５つの質問項目の合成である。ちなみに、主成分分析における寄与率は48.6％であった。また、この関わり度に関して、性別による違いは見られなかった。

参考文献

小方直幸 2003、「学力形成とその測り方」、有本章編『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部75-88頁。

柴野昌山 1991、「大学教育と学生生活の社会的効用―コミットメントによる「かくれた効果」―」『大学入試改善と大学教育のあり方に関する実証的研究』6-44頁。

武内清編 2003、『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。

原田彰・作田良三 2000、「成人の知識・能力に関する調査研究（2）―サラリーマンの仕事上の能力に着目して―」広島大学教育学部教育社会学研究室編『教育社会学研究年報』第３号30-45頁。

丸山文裕 1983、「大学生の文化類型とその形成構造」、広島大学大学教育研究センター『大学論集』第12巻、57-72頁。

溝上慎一 2001、『大学生の自己と生き方－大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学－』ナカニ

シヤ出版。

山崎準二　2002、『教師のライフコース研究』創風社。

山﨑博敏　1989、「エクストラ・カリキュラムの効果」片岡徳雄・喜多村和之編『大学授業の研究』玉川大学出版部95-107頁。

Astin, A. W. 1984, "Student Involvement", *Journal of College Student Personnel,* Vol.25, pp.297-308.

Astin, A. W. 1993, *What Matters in College? Four Critical Years Revisited,* Jossey-Bass.